市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会
会長　大橋　秀一郎
NO．2　（平成 2年 7月 1日発行）　編集　藤本　勇

日中友好学術隊　調査成果あがる

去る５月１日大阪を発った学術隊（隊長　依田恭二　大阪市立大学理学部教授、隊員　神崎　護、下田勝久）の一行は、北京に入り汽車で西寧に向かい、５月１４日ラサに到着した。

ラサから川蔵公路で針葉樹林の調査を行ったが、植物が豊富にあって、予想外の収穫を得た。５月末に再びラサに戻り、６月中旬から登山隊の登頂した四光峰の山麓で一ヶ月のキャンプをして、調査活動をする。

学術隊に同行し、一足先に帰ってきた斎藤清明　毎日新聞記者によると、一行は全員元気で特に依田教授は、樹林に分け入って体調もすこぶる良好とのこと。調査の記事は、毎日新聞に６月末頃掲載される予定です。

調査隊は７月末帰国予定で、成果を『花と緑の国際シンポジュム』－ヒマラヤの南側と北側の自然と生活のテーマで、９月６～７日の両日、大阪国際交流センターで報告されます。（文責　島川　勝）

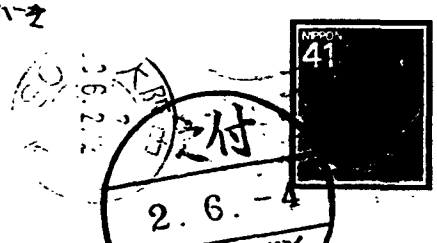
5月28日.　郵便はがき

川蔵公路の高蘭(林芝一直貢間)の調査をおえて、ラサに帰ってきました. すべて順調でしたので、ご安心下さい. ラサで2日間休んで樟木に向い、約1週間調査してから6月中旬から四光峰の山麓で約1か月のキャンプに入ります. 山岳会の皆様によろしくお伝え下さい.

3. ཀ5ཀ"5ཀ51

大白傘蓋佛母
Dugar

（斎藤特急便）



530 大阪市北区西天満
4-6-19
北ビル2号館 304号

島川　勝様

チベット・ラサにて. 依田恭二

四光峰初登頂記念レリーフ完成

弧高の彫刻家、愛媛県八幡浜市の塩崎宇宙氏の制作による四光峰初登頂の記念レリーフが完成。 4月21日、母校キャンパスで除幕式が行われた。

教養部の学生会館前に設置されたレリーフは、1.8 Mの堂々たる自然石に埋め込まれ、青銅の中に四光峰の全景が鮮やかに浮き上がっております。

明治44年生れの塩崎先生は、除幕式への出席を楽しみにしておられましたが、作品完成直後、病のため入院、 4月 8日ご逝去され、文字通りの遺作となってしまいました。

小雨の中、午前11時より崎山耕作学長、木村事務局長、泉最高顧問、大橋会長、塩崎先生のご遺族、中国登山協会の史占春主席など多数の関係者が出席し静かに式典がとりおこなわれました。

その後、本館特別会議室で披露会が行われ、丁度一年前の四光峰登山の苦労話しに花が咲きました。写真同封致します。（文責　佐藤一良）

（レリーフ作成には多額の経費が必要でした。臨時の寄付をお願い致しましたが、未納の方には振込用紙を同封致しますので、よろしくお願い申し上げます。会計担当）

中国登山協会・史占春主席来日

大阪市立大学日中友好学術登山隊組織委員会（会長　崎山学長、委員長　大橋会長）の招待で中国登山協会主席　史占春氏、協会員の楊建国氏、趙建軍氏の三氏が 4月18日来阪されました。

先年の四光峰登山で大変お世話になった史占春主席はじめ、中国登山協会のメンバーを四光峰初登頂一周年記念、学術隊の壮行会、レリーフの除幕式などの行催事の集中する時期に招待したものです。

中国近代登山の指導者でチョモランマの三国合同登山など中国での登山の指揮をとっている史占春は62才、さすがと思わせる立派な体躯と潤達な人柄は始めてお会いする人々を魅了し、約10日の忙しいスケジュールを精力的にこなして離阪されました。

主な行事は下記の通り

4月19日　西尾正也　大阪市長表敬訪問
　　花博見学
　　大阪市大山岳会宴
20日　大島　靖　前大阪市長表敬訪問
　　毎日放送歓迎宴

四光峰初登頂一周年記念式典・学術隊壮行会

21日　四光峰隊員と会食

22日　AACK歓迎宴

23日　京都府岳連歓迎宴

関西山仲間の集い

24日　東京　日本山岳会　山田会長歓迎宴

25日　桜内義雄　衆議院議長会食

26日　橋本龍太郎　大蔵大臣会食

27日　帰国

以上。　（文責　佐藤一良）

新人紹介および新人合宿

ここ数年来、高年令化とともに、行先の危ぶまれておりました市大山岳部にピカピカの新人が入部しましたことをお知らせします。

１年生から山岳部という部員が絶えて、もう10年近くにもなり、OB諸氏にご心配をおかけしておりました。

現在、院１の新人３人を加えて、新人ばかりですが、４人の現役が在籍しています。下田主将（学術調査隊員）の帰国で５人の部員の活躍を期待したいと思います。　新人は下記の通りです。

山本　　新（工院１）　アメフト出身

中岡　健一（工院１）

中井　正人（工院１）　ドタグッ出身

高尾　　裕（文１）

さて５月の連休に黒部内蔵助谷ＢＣで新人合宿が行われました。後半ずっと雨という天気でしたが、何しろテントでねるのも始めてというメンバーもおり、まずまずのところです。

参加者：（現役）山本、中岡、高尾

（ＯＢ）矢倉、尾形、三木、他１名

4/29　入山	5/ 2　沈殿	5/ 5　雪上訓練
4/30　雪上訓練	5/ 3　本峰アタック	5/ 6　下山
5/ 1　真砂尾根	5/ 4　沈殿	

新人ばかりという構成のため、今後の合宿のあり方など問題も多々ありますが、ＯＢ諸氏の合宿参加をお待ちしています。　（文責　矢倉　睦）

山行記録

厳冬季の槍ヶ岳北鎌尾根

伴　明

期　間　1989年12月～1990年 1月

メンバー　伴　明　（50才）

片岡泰彦　（34才）

山本宗彦　（30才）　（明大山岳部OB）

後藤が逝って三年半が過ぎた。その年の暮れに前穂岳北尾根を目指したが、例年になく寒気が厳しかったのと、気分的に滅入っていたためか、簡単に諦めて慶応尾根の頭から引返してしまった。

当時、北鎌尾根の話も何度か出ていて、私としてはどちらかを登らないと追悼にならないと思い込んでいた。

昨年末、北鎌に行くことに決まり、トレーニングはもちろんLOWAのプラスチック高所靴を新調したりして万全の準備をととのえた。

出発の当日、片岡が連れてきたのは、何とも強力な助っ人で1988年日本・中国・ネパール合同エベレスト登山隊のサミッターであった。お陰で文字通りの風雪に明け暮れた 5日間ではあったが無事完登することができた。

しかし片岡、山本両君が一緒でなければ多分途中で引き返していただろう。現に入山した20パーティほどのうち半数以上が天候のあまりのひどさに引返していった。

P2から北鎌のコルまでの間はテントを張る場所が少ないし、それから上も難しい所へくると順番待ちを強いられたり、目を開けていられないほどの地吹雪の中での全天候型登山はきつかった。

P5のアップザイレンでザイル操作を誤り、 5メートル落ちたこと、槍の穂先直下のテントサイトで荒れ狂う烈風と疲労で一時気を失ったのではないかと思わせたことなど不名誉なことも多かった。

それでも風雪の頂上に辿りつき、来し方を灰色の虚空に鮮明に思いを描くことができたときは、久し振りにやり遂げた充実感で胸が一杯だった。

肩の小屋から宝の木までの一時間は激しい降雪の中雪崩の恐怖におびえながら駆け下ったが、サミッターにとっては、この間が一番恐ろしかったので

はないだろうかと今でも思っている。

12月30日　曇り→雪

七倉（6:30）── 高瀬ダム（8:00）── 名無小屋（9:45～9:55）

湯俣（11:00 ～11:30)── 千天出合（2:00～2:10）── P2取付（2:50）

12月31日　風雪（一部地吹雪）

P2取付（7:30）── P2(9:00 ～9:15）── P5.P6 コル（3:10～3:30）── 北鎌コル（4:15）

1月 1日　曇り→風雪

北鎌コル（7:30）── 天狗の腰掛け（9:15）── 独標（11:15）

槍の穂先直下（3:00）

1月 2日　風雪

槍の穂先直下（8:45）── 槍ヶ岳（11:20)── 肩の小屋（12:40～1:20）── 宝の木（2;45）── 槍平小屋（3:30）

1月 3日　風雪

槍平小屋（8:19）── 滝谷避難小屋（9:10～9:15）── 白出沢出合（10:00 ～10:15)── 新穂高温泉（11:30）

東京支部忘年山行

奥田尚志

山で忘年会をしようという事で、1989年11月11から12日にかけて、表丹沢は戸沢小屋の前の水無川の河原で行った。当初の参加予定者は広谷、伴、山田、丸子、そして奥田であったが、丸子氏は風邪のために欠席となり４人となった。

小田急線渋沢駅に集合し、４輪駆動車で戸沢小屋までむかった。徒歩だと一時間強はかかる林道を快適に走り、戸沢小屋に到着。するとカラフルな色のパラパントが視界に現れたかと思うと、次々に目の前の河原に着陸していき、都会の山を感じさせた。

その河原はワンゲル風の高校生や沢登りにきたと思われる人達で賑わっていた。我々は、さっきまで火が燃えていたと思われる石組みを借用し、持参した炭に火をつけてバーベキューは始まった。当初予定５人分であったためもあり、酒もあても充分にあり、全員充分に酔った。酔ったところで山の歌を思いつく限り歌い（苦情がなかったのは不思議なくらい）、戸沢小屋で泊。

すこし二日酔いの頭で起きると、伴さんが水無川本谷を登ると張り切っていた。伴さんに引き摺られるようにして、 9時10分小屋を出る。

アプローチが殆どないのが救いであったが、伴さんのペースは早く、他のメンバーのことを全く考えていない。若いはずの私も遅れないようについて行くのが、二日酔いの身には精一杯であった。

ひとふんばり登ったところで、広谷さんを除く３人は集まったが、広谷さんはいつまでもたつても現れない。あまりに現れないので、途中で小屋に引き返したのであろうという結論に達し、先に進むことにした。

さすがに人の多い沢らしく、なんと滝にはF1とかF2とか埋め込まれていて、お節介にも登り方の注意まであって、びっくりする。しかし、滝は程よく簡単で、振り返れば紅葉も美しく、かつ遠くには湘南の海が見渡せたので、結構楽しめる沢であった。実質的に沢が終了するF9の上に11時に到着し、源頭では少し踏み跡が混乱したが、11時20分には塔の岳山頂に到着。12時まで、風が強くなり冷え込んできた山頂で昼食を取り、13時に戸沢小屋に到着した。

ところが、小屋にいるはずの広谷さんが見当たらない。車の中においてあった荷物もあるし、小屋にはまだ帰ってこないと、小屋のおばあさんが言う。仕方がないので待っていると、一時間以上もたってから、広谷さんが足から血を出しながら戻ってきた。

聞くところによると途中まで登ったところで、諦めてなんと沢をクライムダウンしてきて、その途中で滑ったのだと言う。というわけで、あやふく四光峰総隊長の遭難事件となりかけた忘年山行は終わったのであった。

鎮魂の山「ランタン・リルン」

藤本　勇

半年の間に２回もネパールを訪れるとは考えても見なかった。

昨年の正月に結婚25周年記念と銘打って、女房とネパールへ訪れることが出来、ポカラへ向かう前日の夕方、カカニの丘から残照に映えるランタン・リルンを遠望し、28年前の第１次隊のことが走馬燈のように脳裏に浮かび上がった。

今回はあの山の麓へは行けないが、次にくるときは何がなんでも行くぞ！という気持ちになった。

そうこうするうちに、３月下旬に旅行会社より一枚の葉書が舞いこみ、

「名古屋発直行便。ゴールデンウィークにランタン・ハードトレッキング

空席あり」
それを見ていると、横から女房曰く。
『パパ！　思いたつたら行かな。元気なうちにランタンへ行ってきたら。一週間でランタンに行ける時代やし、亡くなられた森本さんや大島さんの墓にもお参りして来たら。』と『あした、私がさっそく旅行会社に電話しとくさかい』
旅行会社よりの返事では名古屋発の直行便は満席となってしまい、大阪発バンコック経由なら行けますとのこと。今年のゴールデンウィークは暦の上で５月１．２．６日を休めば９連休になるし。よし、何とか仕事をかたずけて行くとするか。しかし、大枚３８万円は少し高い気もするが。それよりも、普通で１１～１２日のトレッキングコースを７日間に短縮するとは相当体力を要するのではないかと心配した。
４月３０日
人々で溢れかえった伊丹空港を飛立つ。
夜９時バンコックに到着。正月と同じく空港前のエァーポートホテルに投宿。同宿の人は昭和５０年に大阪府岳連でダゥラギリ４峰へ行った西村氏（現在松下電気動務）。山の話で深夜まで話り合う。
５月１日
バンコックを10:45 発でカトマンズに向かう。午後 2時にカトマンズ空港に降り立った。空港で28年ぶりにボード・ラナ氏の出迎えを受ける。
昔はカトマンズ市内にホテルが１～２軒しかなく、今のようにゲストハウスはなく、貧乏遠征隊で彼の家を寝城にして大変お世話になった。彼は昔懐かしいフォード車（1945年製）で奥さんと二人で来てくれたが、クラシック車は残念ながらエンジントラブルでタクシーに乗り換えて市内へ。
お正月にいろいろお世話になった方々へ土産をくばってから、ボード・ラナ氏の自宅へ行ってご馳走になった。短時間のうちにいろいろなネパール料理、モモ（肉まん）、ミートボール、ポテトチップスなどをビール、ロキシーで頂いた。彼のお母さんと小生が並んで写った28年前の写真が机の上に飾ってあった。彼の奥さんは日本語ペラペラ。現在カトマンズにある日本語学校の先生、道理で日本語が上手なはず。ラナ氏と昔の話に花が咲き、市大の連中の消息を報告する。
名古屋からの直行便の連中を迎えに空港へ戻って、全員集合したのが夜の10時。貸切りバスで 2時間揺られてトリスリバザールの手前で車を止めて仮眠。

5月2日

明け方 5時までバスの中、せまいシートでは熟睡できない。トリスリバザール、ラムチェをすぎてドンチェに着いたのが午後 1時30分。

昔、来たときはここドンチェに来るまでに、神戸を出てから1ヶ月かけ船でインドへ、そしてインドからネパールに入るのに2週間、そしてカトマンズから徒歩でキャラバンを組んで5日間を要した。それが大阪を発ってから何と2日半で来れるとは隔世の感がする。

ドンチェで昼食のとき15人の自己紹介を行う。

平均30才ぐらいのパーティーで、もとワンゲル出身者が多く、山靴を履きニッカーズボンで身仕度を整えている。小生のように半ズボンでジョギングシューズはいない。果たして、これからの強行軍について行けるのか？皆の足手惑いになるのではと不安にかられるが、まあーひとつ、ネパール風でビスタリ・ビスタリ（ゆっくり・ゆっくり）歩くとでもするか。

心の中ではなにくそ。若いもんに負けてたまるか。これでも元ランタン遠征隊員だぞ。お前らよりランタン・リルンについては詳しく知っているぞとの自惚れの気持もありました。

バルクー村をすぎると登りがはじまる。樹林帯の中をシャブルーに向かう。シャブルーの手前で陽が落ちヘッドライトをつけて歩く。着いたのが夜の8時。

二人に1つのテント、食堂テント、トイレテントまであり、まるで大遠征隊のキャラバンのようだ。

5月3日

4時起床。モーニングティーと洗面器にお湯を入れテントにシェルパが運んでくる。ガネッシュの山々に朝日がさし、今日も天気が良さそうだ。

今日の行程は今回の行動の中でもっとも余裕のある日。

シャブルーを 6時15分の出発。ランタンコーラの谷へ約 400mぐらい下る。そして出会橋より今度は急坂を登る、約 1,200m。昼食はラマホテルという地名のところで、ネパール米、魚の缶詰、野菜サラダ、ホテトチップス、スープ、パン、ティーなど。

部落の人達に昔の黄ばんだモノクロ写真を見せると、自分達の親の姿があり、なかなか写真を返してくれない。昼食後、ゴムナツォキをすぎてゴラタベラに着いたのが午後 5時。

ここからはリルンの東南稜が目の前に聳えて見える。
どうか、もう一日天気であってほしい。
早くリルン氷河を見たい。もし、キャンジュンからリルン氷河を見れば、どんな気持になるだろう。ベースキャンプの近くの昔の墓までは時間的に無理だが、ランタン部落の入口にある記念碑にせめて線香だけは上げたい。

私の青春の山。『ランタン・リルン』それがいま眼前に聳え立つ。
遠くで雷が鳴った。死んだ森本さんが『藤本よう来てくれたなあ。久し振りやなあ。』と言っているようで、一人夕闇せまるゴラタベラのテント場からリルンを仰ぎ見ながら28年前の思い出にふける。
よくも、こんな大きな山へ登りに来たものだ。

5月4日

天気快晴。満天の星を仰ぐ。
3時起床。 4時朝食。いよいよランタンに入ると思うと眠いなどと言っておれない。今日の一日の行動時間を記してみると、何とハードであったか判って頂けると思う。
ゴラタベラ（4:35）── タングセップ（5:35）── ランタン入口（6:40～8:00）── キャンジュン（11:30 ～12:30)── ランタン（14:00 ～15:00）── ゴラタベラ（16:30 ～17:00)── ラマホテル（19:00 ～20:00）── バンブーロッジ （22:00)
ヘッドライトをつけてゴラタベラを出発。夜明けの中を一路ランタン目指して15人は黙々と歩く。ランタンに着いてすぐに記念碑を探しにいく。
女房から聞いていたティリ・ラマ氏の家のすぐ横の岩盤のところに記念碑はひっそりと立っていた。ティリ・ラマ氏に帰路に立寄ると約束して、パーティーの後を追う。
今回の山行は本当に天気に恵まれた。今日も午前中は天気が良さそうだ。
長いマニ石を横手にしながら、広いなだらかな高原状のところを歩く。
普通ヒマラヤの谷はV字谷であるが、ここランタン谷はU字谷で明るく、あちらこちらでヤクが牧草を食べ牧歌的風景を醸し出している。
昼前やっと久遠の地キャンジュン（ 3,790m）に入った。
自分の脳裏に焼き付いて離れることのなかった峰々がいま目の前にある。
リルン氷河、左手にランタン・リルンの頂上、右手に三本槍のキムシュン、

背後にはホンゲントプケ、ランシサ・リ、ナヤカンガの峰々が紺碧の空の下に聳えている。
28年前あのリルン氷河の中 5,600mの大プラトーにいて、頂上アタックを目前に眠りについている時、夜明けまえ大雪崩が発生し、全員テントごと流され、僕達は辛うじて助かったものの、森本隊長、大島氏、ギャルツェン・ノルブ氏がクレバスに落ちて行方不明。
山々は少しも変わっていない。昔のままだ。
ここで、もう一日あれば昔のベースキャンプまで足をのばして、氷河のほとりに建てた墓に参ることが出来るが、今回は団体旅行のため、それは許されない。仕方なく一行より一足先にランタン部落の記念碑に向かう。
記念碑は２次の遠征隊（1964）が日本から銅板に墓標を刻んで建立したものです。

JAPAN HIMALAYAN EXPEDITION
MR. K. MORIMOTO
MR. K. OSHIMA
MR. GYALTSEN NORBU
DIED ON 11TH MAY, 1961。
IN LANGTANG GLACIER

日本から持参したお菓子、森本さんが好きだった煙草のピース、そして日本酒をお供えし、線香をたいた。
合掌の間、泪がとめどなく流れ、故人の冥福を祈り、28年間のご無礼を詫びるのみだった。
記念碑の守りをして呉れているティリ・ラマ氏は英語も出来る好青年（31才）で子供が二人いる。土産の品を手渡すと喜んでくれた。お互いに再会を約束するも、果たして本当にこの地に来れるものかなと後髪を引かれる思いで、ランタンの部落をあとにする。
途中、雷雨に逢いラマホテルで一時雨やどりをして今夜のテント場に着いたのが、なんと夜の10時だつた。

5月5日

もと来た道を今日はドンチェまで。昨日の強行軍の疲れも残っていたが、

今日一日と思い同行のシェルパと一緒にパーティーの前に出て全員を引張る格好で頑張る。ときどき振返ってはランタンやガネッシュの山々に別れを告げる。

さすがに山の上は涼しかったが、ドンチェあたりまで来ると暑い。ドンチェには帰りのバスが迎えに来ており、 3時にバスが出て、カトマンズのホテルに入ったのが夜の11時。

あっと言う間のランタン・トレッキングだつたが、一週間のゴールデン・ウィークの使い方としては最高だったと思うし、前々からもう一度は必ずランタンに行きたいという望みも果たせたし言うことはない。

しかし、次にもし来るときはカトマンズから往復ヘリコプターを飛ばしてキャンジュンまで来て、二三日は停滞してベースキャンプまでは行きたいなあと思ったりもする。

5月6日

朝食後、カトマンズ駐在の共同通信社のアチャルァ氏（泉最高顧問の友人）とボード・ラナ氏夫妻が土産を持って訪ねてくれた。

四人で市内に出る。現在ネパールとインドとの通商交渉がもめていて、物資が欠乏している。特にガソリン、ケロシンがひどく、配給制になっていて一週間に普通車で 4ℓ 、二輪車で 1ℓ のガソリンしか当たらない。

カトマンズ市内は正月と比べて、車の騒音がなく静かになって、まるで28年前に戻ったみたいだ。

午後の便でバンコックへ。

5月7日

連休最後の日曜日。バンコックから機上の人となって大阪へ。

明日からはまた働き人間に戻らねばならない。

今回のランタン・リルンはひとときの夢であったのか、幻であったのか？

（平成元年５月１４日記）

比良の山小屋だより

比良山系の最高峰武奈ヶ岳の中腹にある山小屋（大阪府立高津高校山岳部）はここ数年、市大山岳会の皆様が愛用され、まるで市大山岳会所有の山小屋のようになっております。

この小屋は昭和41年に高津高校山岳部OBと現役の部員が集めた金と体力を出し合って完成した明るい別荘風の山小屋です。なお設計は市大山岳会の進藤汎海氏の手によるものです。

その後、高津高校山岳部は進学校のためか、ワンゲルは存続していますが、山岳部は絶えて10年以上にもなります。

この小屋は最近、高津高校の関係者の利用が減る中で、比良の自然を愛する人や、二世達の若者らが利用するようになって、それぞれが春夏秋冬の山小屋生活を楽しんでいます。

市大山岳会は泉最高顧問をはじめとして、幾多の方々が利用されているなかで、中村光伸氏は小屋主（？）の小生よりも最近は数多く入られ、岡本恒夫氏らは市役所の人達と同行され、また久保田淳三氏は名古屋からご夫妻で利用されています。また、大先輩の三島義彦夫妻や中島喜一先輩は山小屋の前に山桜を植樹しょうとハッスルされています。

昨夏、JR比良駅とリフト乗場までのバス道の横に、白亜の別荘を川勝弘一氏が建てられました。

一泊は川勝別荘で、翌日は高津山荘でお泊まりになる計画も良いかと思います。

山小屋を利用される方は山岳会事務局までお電話いただければ、小屋の鍵を郵送します。

山小屋利用料金　　夏期　¥1,000.　（家族単位の料金で何泊しても同じ）
　　冬期　¥2,000.

（文責　藤本　勇）

事務局日誌（委員会他）

90.2.7　（水）　18:15　市大交流センター

出席者　依田部長、大橋、高木、川勝、藤本、小笹、岡本、佐藤、島川、小林、西村、福山

1)　学術隊壮行会日程について

2)　山岳会委員の選任について

90.3.9　（金）　18:30　市大交流センター

出席者　大橋、藤本、岡本、佐藤、奥田、小林、西村、福山

1)　山岳部新人募集について

2)　会費未納者について

3)　学術隊壮行会次第について

4)　史占春一行日程について

5)　レリーフについて

6)　会費特別徴収について

90.3.20　（火）　18:30　市大交流センター

出席者　大橋、岡本、佐藤、矢倉、下田

1)　史占春一行日程について

2)　学術隊壮行会案内状について

3)　レリーフ除幕式について

90.3.27　（火）　18:30　市大交流センター

出席者　依田部長、大橋、川勝、藤本、岡本、佐藤、奥田、八木、矢倉、斎藤（毎日新聞）

1)　レリーフについて

2)　壮行会について

3)　学術隊ルートについて

90.4.10　（火）　18:30　市大交流センター

出席者　依田部長、大橋、川勝、岡本、佐藤、島川、西村、小松、矢倉、尾形

1)　壮行会次第について

2)　レリーフ除幕式について

90.6.11　（月）　18:30　市大交流センター

出席者　藤本、小笹、岡本、佐藤、島川、小林、矢倉

1)　山岳会ニュースの発行について

2)　史占春一行ほか会計について

3)　学術隊通信について

4) 現役新人合宿について

（総務　岡本恒夫）

ゴルフコンペのお知らせ

ここ数年とぎれておりましたゴルフコンペを大橋会長のお世話で開催致すこととなりましたので、腕に自信のあるないに拘らずゴルフのできる方のご参加をお待ち致します。なお、当日は４組でエントリーしています。

月　　日　　平成２年８月１８日（土曜日）

場　　所　　神戸ゴルフクラブ（日本最古のゴルフ場）

参加申し込みは事務局までご連絡ください。

スタート時間ならびに集合時間は後日ご連絡致します。

（企画運営　川勝弘一）

編集メモ

今年の総会において会費の値上げが決定されました。そして山岳会ニュースの発行を年何回か発行することとなりました。

今回は慣れないワープロ打ちでニュースを編集しました。

史占春一行の来日、レリーフ作成および除幕式、学術隊壮行会と盛り沢山な行事がありました。伴くんの厳冬期の北鎌紀行、奥田くんの東京支部だよりと小生のランタン・トレッキングを載せましたが、次回からは会員各位の近況報告や山行記録などを載せたく思いますので、事務局までご投稿くださるようお願い致します。

慣れない編集で読みづらい点はお許しください。次回からは若手の会員に編集をお願してより良いニュースにして行きたいと思います。

（藤本　勇）